

宅配センター 職員

今回の震災は私たちの暮らしに大きな被害を与えた。

幸い私は軽い被害ですんだのだが、当時私が訪問していた住吉地区はコープこうべの本部も含めて大きな被害を受けていた。

倒壊した本部ビルを見て大きなショックを受けたときの事は、今でも鮮明に私の頭の中に残っている。あらゆるシステムが途絶し食料品の配達すらできなかった震災直後の数日間は訪問組合員の安否確認にひたすら走りまわった。

完全に倒壊して公道をふさぐ格好ではみ出している家、火事で真っ黒になった家、すべてが組合員の家だった。さらにショックだったのはいつも元気に協同購入を利用されていた組合員が亡くなられたことだった。

当時生後1カ月の娘と妻は実家で静養中だったのが、震災前日の16日の夜に我が家へもどってきていたのが幸いして一命をとりとめた。実家の家具は倒れ、テレビは飛び、家屋は半分に倒れていた。そのことを考えると何となくホッとした反面、複雑な心境にたびたびなった。

ライフラインが断絶し、普段、当たり前のように使っていた電気、ガス、水道がない生活はつらかった。あらためてその有り難みが痛いほどわかった。また様々な人々からの温かい言葉やはげましは何とも言えずうれしかった。私も仕事を通じて組合員の手助けとなればと全国の生協の仲間からおくられた救援物資を一生懸命配った。喜んでいただいたときは私も嬉しかった。

あれから半年が過ぎて、一日一日とまちは復旧し、人々はもとの生活にもどるべく頑張っている。私たちも創造的復興に取り組む者として、21世紀に向かってやらなければならない課題は山積みになっている。どのくらいの時間が費やされるかはわからないが、これらすべての課題が解決されたとき、きっと神戸のまちは震災以前よりすばらしいまちに生まれかわっているに違いない。

宅配センター職員

1月17日。この日は、神戸の人にとっても、そして、私にとっても、忘れられない日になりました。阪神大震災。

1つの大きな地震で、たくさんの人の生活が、がらりと変わってしまいました。

コープこうべも、店舗をはじめ、大きな打撃をうけ、組合員さんも大きな被害にあわれました。この大震災を通じて私が最も感じたことは、人と人とのつながりの大切さや、助け合いの精神の重要さです。

この絶望的な雰囲気の中で、お互いを助け合う気持ちがあったからこそ、10月になった今、ここまで復興することができたのだと思います。私自身の仕事内容も、日頃から便利に使っていたコンピューターが使えなくなったり、「めーむ」の印刷ができなくなったの手書きチラシ、絶対的な品不足など、これまでとはがらりと変わってしまいました。

休日にはボランティアに参加、気の遠くなるような交通渋滞、被災した親戚達との共同生活と、何もかもが目まぐるしく過ぎていき、次第に疲れがたまってきましたが、

「今、頑張らないでいつがんばるんや」「俺より大変な人は、いくらでもおる」といった気持ちが、自分を奮い立たせました。ボランティアというものも、以前は私自身の中では、ただの言葉でしかなかったんですが、この震災を通じて、その大切さを学ぶことができました。

「人は1人では生きてゆけない」・・・使い古されたフレーズですが、今初めて、その言葉の意味を実感できたように思います。確かに、私達はこの大震災で多くのものを破壊され失いました。

しかし、得た物も大きかったと思います。そして、この気持ちを忘れずに生きてゆくことが、これから大切なことであり、それこそが創造的復興へとつながっていくのだと思います。

宅配センター 職員

震災で家が全壊しました。死んでもおかしくない状況で母と2人でなんとか脱出し、母をその場において、近所の家で閉じこめられてしまった人の救出に向かいました。

その後勤務先に連絡し、数日後、東二見の兄の家から朝4:40に家を出て出勤するというつらい日々が数カ月続きました。

その間の業務で一番印象に残っているのは徹底的な組合員の所在確認です。私の担当区域は芦屋の山の手ですが全壊・半壊した家が多く、避難先から無惨に壊れた家に、とりあえず必要な物だけでも取りに来た組合員とたくさん会いました。お互いの震災体験を話し、涙を流す組合員もいました。自分の所も大変なのに食器や衣類を頂いたりもしました。この時は仕事というよりも自分の義務のような感じがして1人でも多くの組合員と話したいと思いました。

しばらくしてOCRが復活して業務の流れはしだいに震災前と同じになってきましたが、私の中で以前とはっきり違う事がたった1つだけですがあります。それは自分の担当区域の組合員は私が守っていききたいという気持ちです。他の流通セールス、もっと言えば、他のどの地域担当が廻るよりも私がいいと言われるように組合員に喜んでもらいたいと思うようになりました。そう思われるようにするには基本的なところでは明るく元気なあいさつ、時間、約束を守る、本当に組合員にとって必要な商品の紹介等があると思います。その辺に自分ならではの配慮というか気配りも大切にしていきたいと思います。

店舗職員

1月17日、まだ夜が明けないうちに、大きな揺れで目を覚ますと、同時にタンス、食器棚の倒れる音。何がおきたかわからないまま玄関の外に出ると、近所の人達も出ていた。しかし、玄関のドアが開かない所があり、なかなか外に出れない人がたくさんいる。そのためベランダをつたい避難はしごを使って、マンションの外に出た。

そこで、今まで話した事もない人達と無事だった事を喜び、後で皆で協力し合ってドアの開かない部屋を開けていった。そして我が家に帰って部屋の中を見てア然とした。すべての物が倒れ、壊れていた。とにかく部屋の中をかたづけ、近くのミニコープに行き、店長さんに他の店の様子を聞いたが、わからずにその日はそのまま過ぎていった。

次の日、自転車でお店に行くと多くの人が店の回りにいたし、従業員も多くの人に来ていた。少しでも早く組合員さんに物を提供するため、暗い店内から商品を持ち出し、店の外で販売する。その時、組合員さんから「皆さんも大変なのに、お店を開けてくださってありがとう」と喜んでもらった時はうれしかったし、さすが生協だなあと誇りに思った。

何日か外で販売しながら早く店を再開する事を目標に従業員全員が協力し合い、1つになって部分的でもオープンできた事はよかった。

その時私達が思っていた事は、組合員が、「今、何に困り、必要な物は何か」を理解し、いち早く提供することだった。それで喜んでいただいた時は本当にうれしかった。この時に私たちがとった行動が組合員に信頼され、安心してコープを利用していただけている。

あの時から早くも10カ月たち、だんだん記憶が薄れていく中、もう一度、あの時の誰もが困った人を助け、協力していた事を心に深くきざみ、気持ちを忘れずに頑張っていきたい。それと同時に今、組合員にとって何が必要かもう一度考える時だと思う。

店舗職員

震災当日（1月17日）私は、第3地区のコープミニ5店舗の統括担当であった。

当日西宮へ行くのに、約8時間かかったが、とにかく5店舗がどのような状態になっているのか、また店長をはじめ、職員全員が無事であるかの確認を急いだ。各店とも、メイトマネジャーをはじめアルバイトさんに至るまで、自宅が全壊・半壊しているにもかかわらず、店の方へ応援に来てくれているのを見て非常に感動した。特にコープミニは本当にメイトさん、アルバイトさんで運営されている事に、今までやってきた事に自信を感じた。店によっては2日目より開店した所もあった。地域組合員も行列ができるほど来店されたが、買い占めもなく、整然と並んで買い物をされていた。ある組合員は、「みなさんも被害にあわれているのに、店を開けてくれて本当にありがとう」と言われ感謝されていた。コープこうべが阪神間にあり、多くの組合員の支えになっていること、またコープこうべの職員であることに本当に誇りを感じた。商品の手配も、多くの人達が、鳴尾浜物流センターにて、徹夜同然で商品確保をしていただき、各店に配送していただいたことに感謝します。また、ユークオープをはじめ、全国の生協の仲間の応援にも頭の下がる思いでした。一人の力は小さくてもみんなで力を合わせれば、本当に大きな力になる。言葉で言うのは簡単であるが、これが生協の原点であることを身をもって感じたのが自分自身の今回の震災での一番の成果である。

今後、一日でも早くコープこうべを復興させることが全国の生協の仲間、地域組合員への恩返しになると思うし、それが自分自身の生きがい、働きがいになる。本当にありがとうございました。